

## ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (28)

元々、彼は軍務に秀でただけでなく諸学に精通した人で、文化や風俗を冷静に分析する学識を備えていたようです。そのため、捕虜の身分であっても日本に対して悪い感情を抱くのではなく、学問研究を進める中立的な態度でこの国や人々の様子を観察していました。

このようなことから、ゴロヴニンの著作はフランス語やオランダ語、英語などの言語に翻訳されました。この訳本の流通は、彼自身も予測するように、本書が当時日本と交流のあったオランダ人以外の人物によって書かれた日本人論であることにヨーロッパ人が魅力を感じたことも大きな要因になっています。<sup>(2)</sup>

日本でも前述の馬場佐十郎(1787-1822)の情熱が翻訳書を生みました。当時、公務で函館に滞在してゴロヴニンから教えを受けていた馬場は、オランダ通詞でありながら英語やフランス語が理解できる人物で、ロシア語の習得についても熱心でした。そのためか、ゴロヴニンの著作には高い関心を示し、のちにシーボルト事件に関与したとして獄中死することになる高橋景保と共に、1817年に刊行されたオランダ語訳本を入手して書写しました。特に、馬場にとっては「恩師」の著作です。彼は幕府から翻訳の命を受けていましたが、死期を悟っていた馬場は門下の杉田立卿と青地林宗にこれを託し、彼の死と同年の文政五(1822)年に『遭厄日本紀事』(写真)として翻訳が完成し、十二巻付録二巻で刊行されました。

一方のリコルドの著作は、“Записки Флота Капитана Рикордаоплавани и его къ японскимъ берегамъ въ 1812 и 1813 годах” (Санктпетербургъ, 1816)で、わが国では『1812および1813年日本沿岸航海および対日折衝記』などと呼ばれています。この著作はゴロヴニンのものとは異なり、纏まった日本論のような記述は少ないのが現実です。ただ、日本人については嘉兵衛の性向や名誉感などを取り上げていますが、事件の経緯と日本との交渉記録であることから、ゴロヴニンの著作ほど注目されていません。しかし、フランス語版なども刊行され、本学図書館が所蔵する『遭厄日本紀事』の中では、付録として翻訳されています。<sup>(3)</sup>

## ■言葉の理解の重要性

前述の馬場佐十郎と足立左内の語学研修は、徳川幕府が当時を代表する蘭学者にゴロヴニンから急遽ロシア語を学ばせようとしたものです。そこには、鎖国体制のもとで度重なるロシアの南下政策に対応しなければならなかった幕府の苦悩が表れており、老中松平信明ら幕閣が双方の意思を主張してお互いの立場を理解しあえる言語にこそ平和のきっかけがあると考え始めていた現れです。

また、時を同じくしてカムチャッカでは、リコルドと高田屋嘉兵衛が双方の母国語をもとにした「二人だけの言葉」で事態の収拾に向けた努力していたのでした。

さらに、事件の終結後にはロシア語をはじめとした多くの言語による書物がヨーロッパに広がり、原典の刊行から六年後にはわが国の言葉でも精読できることになったのです。

こうして考えると、この事件の中で人々が共に求めていたものは、まさに「言葉の理解」であり、それが国籍を越えた「心の理解」に繋がり、遂には難しい外交交渉を成立させたのです。これは、二百年の時を経た現在でも変わらぬもので、局面に変化はあっても、言語による相互理解は人類の普遍的な原理であることを改めて認識させられる二人の書物なのです。

## 基本的な参考文献と脚注

- ゴロヴニン(著)井上満(訳)『日本幽囚記』全三巻 岩波文庫 1996年。
- ゴロヴニン[著]徳力真太郎訳『ロシア士官の見た徳川日本』講談社学術文庫 1985年。
- 須藤隆仙・好川之範(編)『高田屋嘉兵衛のすべて』新人物往来社 2008年。

## 註

- (1) 上記の『日本幽囚記』中、「1812および1813年日本沿岸航海および対日折衝記(ビョートル・リコルド手記)」の264頁-265頁。
- (2) 『日本幽囚記』の「第一版序」においてゴロヴニンは「あらゆるヨーロッパ人中彼等のみが入国を許された日本について何をオランダ人に期待できよう」と述べている。
- (3) 書誌的にみるとゴロヴニンとリコルドの日本関係の著作は一対視されて合本されることがあり、その場合の書誌記述はゴロヴニンの著作を優先することが多い。  
なお、本学所蔵の『遭厄日本紀事』は写本で、十二巻付録四巻から成っており、付録である十三巻から十六巻までがリコルドの著作となっている。書写年は不明。

おくまさよし(司書・図書館事務長兼管理運営課長)